送り返すについては、享和二年（一八〇二）、文政元年（一八一八）にも同じような例があったことを書きしるし、宝暦四年（一七五四）からは、遠国からの遍路が病気で送り返しを希望した場合は、大阪屋敷まで送り届けることになっていると指摘している。また送り戻しには、郡代の手形、古目番所入り切手、遍路の願書各一通と往来手形、舟揚げ切手各二通、庄屋の書状一通を添えると書き送っている。

もう一つは、備後国（岡山県）芦品郡行縢村の甚助とその娘ひめの場合、順拝中の文化十四年（一八一七）八月、甚助は宍喰で病気となり、娘や村人達の温かい介抱のかいもなく死亡した。甚助は当地の作法によって弔い、残された娘は順礼を続けたいと希望したため、道中必要な書類を持たせ送り出したと記されている。

江戸時代の遍路の旅の一面をうかがい知る資料として、以下その覚書全文を載せることとする。

追記、長野県飯田市住の斉藤文男が、昭和五十八年一月四国の途中に、この古記録のことを知り、同県人の遍路金物屋利兵衛の身元について調査中の由である。信仰の功徳によって、百数十年もの昔、遍路としてわが町を訪れた遠国の人の、身元や消息がわかれば幸いである。

(二)　道路の発達

1、国道五十五号線

旧土佐街道の改修は、明治十四年から二十年まで海部郡各村連合会が行い、同三十六年からは県営で改修工事に着手、四十三年迄に八坂八浜の難所を残して完了した。大正四年から再び県営で起工、同十一年四月松坂トンネルを最後に開通して、県道日和佐甲浦線と呼ばれるようになった。

太平洋戦争後十数年を経て、池田内閣が高度経済成長政策を樹立した頃から、自動車の台数は急速に増加してきた。自動車の増加は、必然的に交通量の増大をもたらし、産業基盤の増成強化のためにも、道路整備が強く要望されるようになった。

昭和二十九年には一応道路整備五か年計画が策定された。しかしこの計画は、その後数回にわたって改訂され、多額の道路投資の結果、全国の道路整備は急速に進んだのである。

県道日和佐甲浦線も、国県道の再編成によって国道に昇格し、一般国道五十五号線と改弥、地方建設局直轄の改修が進められるようになった。

本町内の改修工事は、昭和四十三年から着手された。町民の間では、通町の旧国道を拡幅するのか、或は街の東西何れの方へつけ替するのであろうかと関心がたかまった。建設当局からは、海岸を通って、川口と港の上を大橋で跨ぎ、古目からはトンネルで県境へ貫くルートが示された。町議会でもいろいろ検討された。国道は街の西側水田地帯を通り、鉄道は海岸を通れ、などさまざまな意見がだされた。結局東洋町側との関係もあって、港をまたぐ海岸線に決定されたのである。

工事は水床トンネルが昭和四十七年（一九七二）三月、宍喰大橋は一年遅れて四十八年三月に竣工し、本町内の改修工事は完成した。

水床トンネルは、延長六三八㍍、幅八㍍、高さ四、五㍍、三井建設株式会社の施工である。

宍喰大橋の型式は、三径間連続ボックス桁、及び三径間活加連単純合成板桁橋といわれているが、素人には理解し

交通量とその増加は次の通りである。

徳島県調査　右段五二年度左段五五年度

観測地点		観測区間番号	区間延長(km)	歩行者類	自転車類	荷車 牛馬車類	動力付二輪車類	自動車類 乗用自動車類 軽乗用	乗用車	バス	計	貨物自動車類 軽貨物	小型貨物	貨客車	普通貨物	特殊車	計	合計
市郡 区町村																		
阿南市見能林町西石仏		三四	六・八	三四 九九	二五 三三	〇 〇	六九 八六	一〇四 一四一	五〇四 五六三	一八 三三	六三四 七〇五	一〇四 一四一	一六〇 一三五	四三 五九	一四 一三	四九 五九	一〇八 一三〇	一〇八 一三〇
〃 橋町幸田		三五	五・九	一二 三六	一九 二二	〇 〇	二五 二九	五九 六〇	二六 三五	一六 一九	四二 五四	八六 一一	七〇 八八	四一 五四	一四 一三	一七 二九	一六 二〇	一六 二〇
〃 福井町鉦打		三四	五・〇	一四 一九	一四 一四	〇 〇	一四 一四	二〇 二四	一三 一八	一八 一四	二八 二四	二六 二四	一四 一六	八六 一〇	一四 一五	一〇 一三	二四 二四	二四 二四
海部郡日和佐町字深瀬		三五	一一・七	一三 一九	一四 一四	〇 〇	六 一九	一六 一三	一五 一九	一六 一六	一七 一九	二六 二五	二四 二四	二六 二四	二六 二〇	一四 一八	一九 一八	三〇 三四
〃 日和佐町奥河内		三六	一五・〇	一八 一九	一八 一六	〇 〇	一四 一六	二四 三三	一四 一四	二三 二四	二六 二四	二六 二四	二四 二四	二六 二〇	二六 二〇	一四 一八	二〇 二四	三四 三四
〃 牟岐町中村		三七	三・五	一二四 二一	二五 二〇	一 一	二六 二八	二四 二五	二四 二六	二四 二六	二四 二六	二六 二四	二四 二六	二六 二四	二六 二四	二六 二四	二四 二四	三四 三四
〃 海南町浅川別当		三八	七・六	三 五	四 四〇	〇 〇	八五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五	八五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五	一〇五 一〇五
〃〃 海南町四方原杉谷		三九	二・九	二六 三三	一六 一九	一 一	二六 二〇	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五	二五 二五
〃 宍喰町那佐		四〇	八・一	一四 九	一六 二四	〇 〇	九五 一二八	一四四 一六	一〇五 一〇五	二五 二三	一三五 一三三	二四 一四	二四 一四	五九 五六	二四 二四	二六 二四	一三四 一三〇	一三四 一三〇
〃 宍喰町正枝		四一	一・二	一四 一三	一六 一六	一 一	一四 一二九	一四 一四	一六 一六	二四 二四	一六 一六	二四 二四	一四 一四	一四 一四	一四 一四	一四 一四	一六 一六	一六 一六
徳島市南昭和町一丁目		二六	二・六	一四四 一八九	一六四 一四四	一六 一	一〇七 一二四	一〇七 一五四	一〇七 一六四	二四 二四	一三七 一六四	一三七 一四四	一六七 一四四	一五六 一四四	一四七 一四四	一四七 一四四	一三七 一六四	一三七 一六四
〃 勝占町榎原		二七	三・〇	三 八	一八 一六	六 六	一五 一五	一五 一五	一五 一五	四 四	一五 一五	一五 一五	一八 一八	一六 一六	一五 一五	一五 一五	一五 一五	一五 一五
小松島市江田町大江田		二八	一・五	八 九	一四四 一四四	〇 一	一五 一五	一〇三 一〇三	一〇三 一〇三	四 四	一五 一五	一〇三 一〇三	一二四 一二四	一〇三 一〇三	一四 一四	一四 一四	一〇三 一〇三	一〇三 一〇三

難い名称である。この橋桁は、高田機工株式会社の製作で、はるばる海上を運んできて現場で組立てた。町民はこのような巨大橋の架設工事は始めてのことで、弁当持参で見物する老人もあった。本橋の延長二九六、二メートル、幅は一〇、九メートル、である。

国道五十五号線全線の改修が完了し、金目県境から徳島市迄九十キロメートル、高知方面は、同所から（室戸岬四十キロメートル、）高知市はりまや橋迄一二二キロメートルとなり、改修前に較べてそれぞれ十キロメートル以上短縮された。

2、県道久尾宍喰浦線

この路線は、本町中央を貫通する幹線であるが、明治期迄は険しい山道のところが多く、不便この上も無かった。本町産業の開発にも大いに支障となるので、明治三十六年改修を計画して、時の村長池内祖二が熱心に推進したが実現できなかった。海部郡会で補助予算の決議もされたが、県費補助が容易に認められなかった。たまたま日露戦争のぼっ発が災いしたと言われている。その後も度々陳情を繰返したが意の如くに進まず、ついに郡会でも四十五年一月に補助議案は廃案とすることに決まったので、村営改修工事は一応断念せざるを得なかった。

大正四年一月郡会の議決によって、郡費支弁道路第一種線に認定された。工事は、大正六年度から九年度迄の三カ年継続事業として施工されることとなり、六年十月起工し九年五月に竣工した。日和佐甲浦宍喰浦分岐点から角坂小学校の下まで延長二五四八間（約四、六二八メートル）、幅員一〇尺―一二尺（三メートル―三・六メートル）が完成し工費は二一、二一八円を要した。その内本町負担は、六、二九四円及び寄附金一、〇四九円であった。

大正九年八月二十四日本線の郡道編入が告示され、路線名も皆津宍喰線と変更された。引続き改修の継続を要望し、大正十一年一月の郡会で第二期改修費予算が議決された。工事は同年五月着手し、延長四六九間（約八五三メートル）が翌十二年三月に竣工した。工費は一二、二六七円であったが、本町は工事費一、六八〇円及び用地補償費寄附八四三円を負担した。